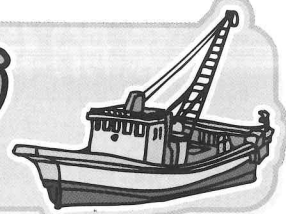




何でも魚^{うお}ツチング



No.81 『庄内浜の増えた魚と減った魚の先に見えるもの』

底魚の多くは、漁獲努力量の削減や目合拡大クラゲが挙げられます。

型クラゲが挙げられます。他にイワガキや厄介者の大型クラゲが挙げられます。

増えている主な魚(図1関係)

アラ場以浅の魚種ではマダイ・ヒラメ・ハタハタ、アンコウ、タラ場以深ではハタダイ・ヒラメ・アカエビ(紅エビ)・ズワイガニ・マダラ・ヤナギムシガレイ(柳)・ムシガレイ(大羽)、浮魚関係ではクロマグロとサワラをしてトラフグです。他にイワガキや厄介者の大型クラゲが挙げられます。

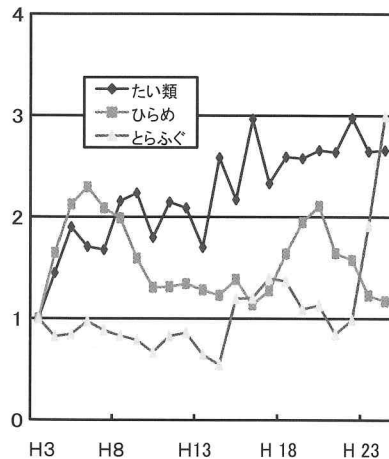


図1-1 アラ場以浅で増えた魚種

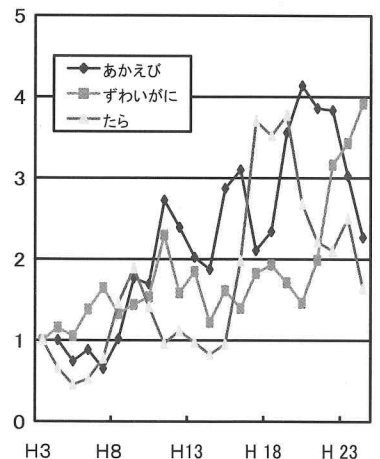


図1-2 タラ場で増えた魚種

また、平成の始めまで千t以上獲れていたスケトウとホッケは北海道と同様に大幅な減少傾向にあります。スケトウは平成10年に韓国のおタートルボート船が最上堆から去り回復するものと信じていましたが、日本海北部全体の資源の減少によるものでした。

減っている主な魚(図2関係)

アラ場以浅の魚種ではキス・マガレイ(口細)、タラ場以深ではスケトウ・ホッケ・アブラツノザメです。

大等、漁業者の自主規制の賜物です。特にハタハタとアンコウは当時の5倍以上の水揚げとなりました。また、漁獲対象になるまで4〜5年かかったマダラや紅エビのように着底稚魚の生き残りが非常に多い年の年級群が資源を支える魚種もあり、その多くは寒い冬の年に発生します。

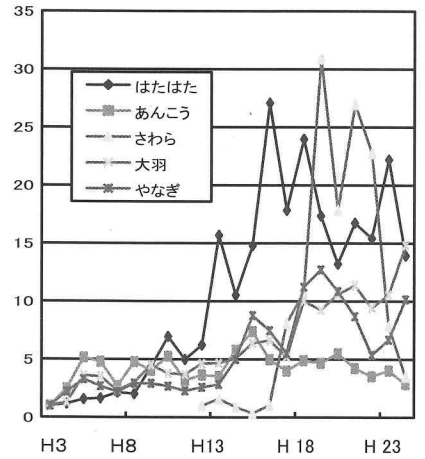


図1-3 5倍以上増えた魚種

今までのやり方では当時の半値となつていく魚価低迷の対応にはなりません。みんなを知恵を出し合つてできることから一つ一つ進めていきたいと思います。

今後の課題

資源管理型漁業は、再生する生物資源を利用するため上手に漁獲すれば永久に続けることが可能であるとの発想から始めました。水揚げが増えた魚種も多くありますが、原因不明のまま計画どおりに増えなかったり、相変わらず卓越年級群に依存しないと豊漁が望めなかつたり、日本海北部海域全体の傾向として減少する魚種があることがわかってきました。

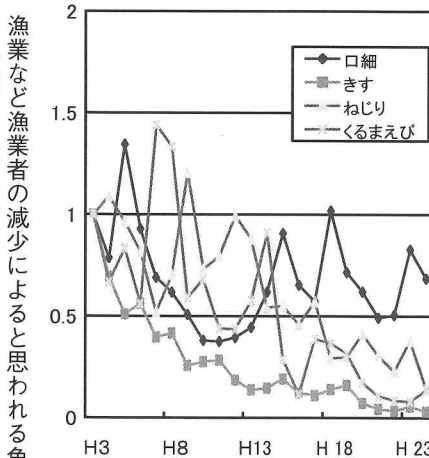


図2-1 アラ場以浅で減った魚種

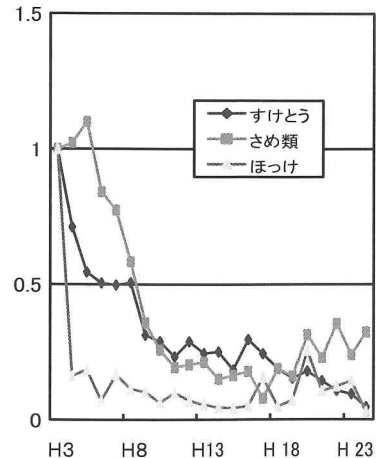


図2-2 タラ場で減った魚種

● 庄内浜の男なら、粋に着こなす救命胴衣

水産試験場 副場長 佐藤 洋